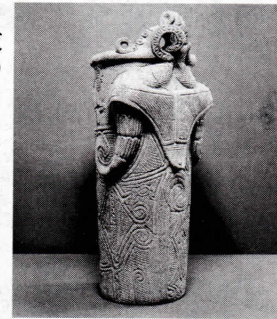


評・三浦 佑之（古代文学研究者）
（立正大教授）

能力や体力に優れた猿人ではなく、森を追われた劣弱な猿人が、最古の石器を作り出したのだという。たしかに自分の生活を考へても、おのれに足りない部分を補おうとして道具

道具にひそむ深層心理

驚くほかないが、「神像筒形土器」と名付けられた縄文土器の制作者は、現代ならさしずめ人間国宝に認定される土器作りの名工だ。どうしてこんなすごい造形や文様が生みだせるのか。そこには何か重要なメッセージが隠されているに違いない、と思わされる。



神像筒形土器（国重要文化財、井戸尻考古館所蔵）

を求めるというのはよくわかる。

そして道具は、たんに実用性や機能が優れていればいいというのではなく、もうひとつの何かが求められるものらしい。それは何なのか。

たとえば、火炎土器をはじめとした装飾過剰ともいえる縄文土器について著者は、「特別な用途の土器ならいざしらず、食物の煮炊きや、容器物に使うだけなら、なぜそれほどまでに、手をかけた土器の飾りに執着しなければならぬのか」と述べる。どうやら、ああした土器は日用品だったらしい。日々の暮らしのなかに置かれるからこそ、飾られる必要があったといふことか。

底にひそむ何ものかであり、言葉ではあらわせないもの、現代の科学による分析さえ不可能な領域ではないか。そうであるからこそ余計に、そこに語られる「深層心理のかすかな表徴」を、私たちはどうしても聴いてみたいと思ってしまうのだ。

本書は、今年四月に没した考古学者が、大学学長の激務をこなしながら時間を見つけて書きつづったエッセイをまとめた遺稿集で、「一篇ごとに石器や土器のカラー写真が添えられている。道具とそれを使う生活に関する、考古学という学問に関する蘊蓄のある文章を読み、あざやかな写真を眺めていると、何千年も前の世界に引き込まれてしまう。

100頁、あまりの小さな本に並べられた文章と写真は、私にとってもなく贅沢な時間を与えてくれた。

◇とぞわ・みつのり 1993.2.20
12年。長野県生まれ。考古学者、元明治大学長。